

作品発表

石川啄木の父  
離僧後の一禎

The Father of Ishikawa Takuboku

水野信太郎

MIZUNO Shintaro



版画-1 僧籍を失ったまま晩年を迎えた石川一禎



作品-1 函館公園の啄木歌碑：函館の青柳町こそ



作品-2 函館公園内の旧市立函館図書館正面車寄



作品-3 啄木文庫を守ってきた旧函館図書館書庫



作品－４ 市街地を走る路面電車沿線からの函館山



作品－５ 石川家の墓石背面と遠景に望める函館山

石川啄木（いしかわ・たくぼく、本名は石川一：いしかわ・はじめ、1886～1912）は、明治期の日本を代表する歌人である。その啄木が今なお国や地域をこえて多くの人々を惹きつけている理由は、はたしてどこにあるのだろうか。ひとつには啄木短歌が文語表現とはいえ現代人にとっても理解し易い表現であり、そのうえ作品世界に詠いこまれている主題に、今日的であり普遍性に富む時代をこえた内容が盛り込まれているからであろう。

だが、それだけでもなさそうだ。実は石川啄木という一人の近代人が歩んだ実人生そのものが、きわめて劇的であったという事実にも、わたくしたちは心が吸い寄せられてしまう。啄木をとり巻く数々の事件には、若者ならば誰しもが抱きがちな将来への果てしない夢や、時には野心さえもが見え隠れする。それでいて半面とりわけ晩年に至っては、結核という豪病やそれに伴う酷貧も影を落とす。そのような多面性こそが背景となって、21世紀にあっても彼はなお有益な文学者である。現代人が今を生き抜く際、大きな同伴者となって、わたくしたちに強い力を与えてくれる。啄木の辛酸に比べればナニ負けてなるものかと、わたしたちは日々なお生きていける。

上記のように石川啄木は薄幸ながら、意義深い存在である。だが彼の父もまた深く悩める男であった。石川一禎（いしかわ・いってい、幼名は宗次郎：そうじろう、1850～1927）は岩手県の石川家に生まれるが、この生誕時から謎を含んでいた。彼の母親ゑつは、妻と死別した石川與左衛門の後妻として嫁す。ところが、その農家には先妻が産んだ男子が4人も成長していた。つまり一禎は生まれながらにして余計な子であった。跡継ぎには到底なれない。しかも母が石川家に嫁いだ時点で、先夫の子として身籠っていたという見方さえある。その真偽の程は不明だが、いずれにしても彼が石川家で冷遇されたという史実は残っている。真の父親の如何に関わらず。

最も象徴的な事実、たねご（種児か）として他家へ養子に出された前後である。たねごとは子供に恵まれない夫婦を迎える養子である。たねごを貰った夫婦には、

不思議なことに実子が出来たという。筆者の母の父が実体験者で、大おばの嫁ぎ先の息子に子がなく正式な養子として迎えられた。そののち何と4人も弟妹が生まれている。戸籍上は長男扱いの立場とはいえ、家族内で自分だけが実の子ではない境遇であった。一禎の事例でも養家に実子が生まれ、彼の場合は石川家へ戻される。つまり邪魔者として追い出されたのだ。しかし一禎は戻った石川家にも身を置くことが叶わず、幼少の僅か満3歳にして大泉院へ修業に出る。もう一禎には仏寺以外、自分が生き延びられる居場所がなかったのである。

本作品発表では一禎との縁が必ずしも深かったとはいえない函館のまちに注目する。作品－1に掲げる啄木歌碑および同－2ないし同－3の函館図書館は函館公園の中にある。啄木が「函館の青柳町こそかなしけれ／友の恋歌／矢ぐるまの花」と短歌に詠った函館での生活に一禎だけはいない。京子を囲む啄木夫妻、少し遅れて母カツも加わる函館暮らしに一禎は含まれなかった。しかし縁浅かった彼も、死後は函館の石川家墓地（作品－5）に眠る。なお函館から浜民村へも分骨が後年なされた。彼が十五世住職を務めた宝徳寺墓所への埋葬である。

その萬年山宝徳寺の住職を一禎は明治38年（1905）に罷免される。宗費滞納という金銭面での問題だけでなく、地元の檀家たちとの間にも課題はあったようで檀家衆の半分からは好ましく思われていなかったらしい。後年、はれて宝徳寺に遺骨が迎えられた事実で救われる。なぜかと言えば一禎という名は、いかにも僧侶の名前だからだ。だが版画－1に見られる生前の一禎は悲しい。

長女サダと孫の真一と妻カツと長男啄木などに先立たれた彼が身を寄せたのは、次女トラの嫁ぎ先である山本家であった。版画は、そんな一禎晩年の姿。唯一と言ってもよい父親らしさは、豊かに蓄えられた白い口髭のみであろうか。それよりも、わが身の置き所にさえ苦慮している居心地の悪さが伝わってきそうな気配だ。彼は娘婿の山本千三郎が鉄道院の高知での最高責任者として着任した高知駅の官舎で、険しく長かった生涯を閉じた。